東岐波ふれあい散策マップ

❶東岐波の干潟　東岐波の干潟は月崎、若宮、波雁ヶ浜、黒崎、三神社に囲まれて約90haと広大で、日の山を背景に絶妙な景色です。

遠浅で満潮時の深さは1m～3mになります。このような干潟は全国的にも希少な存在で、干潟に棲む生き物は磯カニ、シャコ、マテガイや僅かにアサリやハマグリ、河口干潟にはシオマネキ等が生息しています。また、カモメ、鴨、千鳥等の餌場や休息地になっています。

最近は、県外からもカイトボード愛好者が集まってきます。近年自然環境の面から干潟の重要性が見直されつつあります。

❷日の山　小・中学校の校歌にも歌われている日の山は、別名「向陽山」といい、象の姿に似ているので、象山とよばれることもあります。

標高は146mで、中腹の千畳敷から南東方向に、九州の国東半島や姫島が見え、頂上から北東に鳳翩山、大平山、草山（筈倉山）等が見えます。

天智天皇の2年（663）に、日本軍は朝鮮半島、白村江の戦いで新羅軍に敗れました。国土防衛のために烽火の制度が設けられ、江戸時代末頃には、下関市の火の山や山陽小野田市の火の山とともに通信合図の狼煙場があったようです。

❸焼火神社　日の山山頂の東側、一段低くなっている平坦地に神社があります。

東岐波や阿知須の人達は、火難除けの神として秋穂二島の焼火神社を崇拝していましたが、遠距離のため参詣には不便を感じていました。岐波浦では弘化3年（1846）に、阿知須浦では文化5年（1808）と明治10年（1877）に大火がありました。

火災鎮護の神を勧請しようとする気運がたかまり、明治13年（1880）に隠岐国（島根県）の焚火神社等を統括している出雲大社から分霊を勧請して社殿を建てました。

主祭神は、比奈麻治比売で火伏せ、火災鎮護の神です。

明治16年に焼火神社にガス灯火台を設けました。

❹月崎岬古墳群　月崎岬の先端に近い丘陵地には、三基の横穴式石室墳があります。すでに盛土が流失し、石室が露出した状態になっています。

平成2年頃の発掘調査で石室の周囲から多数の土器類が発見され、ほとんどが須恵器類で、坏・高坏・短頸壺のほかに、土師器の杯・壺や滑石製紡錘車なども出土しました。

石室は南東に開口し、遺体を安置した玄室にあたる部分は長さ1.5m、幅約1mで、その床面に多数の小円礫が5cmの厚さで敷き詰められていました。

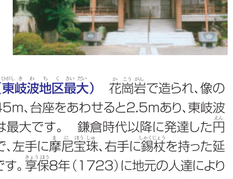
これらの古墳の時期は出土した遺物から古墳時代後期(6世紀末～7世紀初め)頃と考えられ、若宮古墳群とほぼ同じ時期です。

❺月崎縄文遺跡　月崎縄文遺跡は、昭和31年7月、子どもと海水浴にきていた小野忠熙氏（当時山口大学助教授）によって発見され昭和36年、37年、54年の3回発掘調査されました。西部瀬戸内地域を代表する縄文時代の海浜集落跡です。

前期（約6000年前）の集石遺構や後期（約3000～4000年前）の住居跡の他、多数の土器片、石斧、大分県姫島産黒曜石の石鏃（矢じり）や網のおもりとして使った石錘・土錘が出土しました。

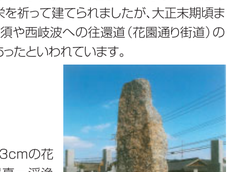
❻若宮古墳群　古墳群は、若宮の洪積台地に横穴式石室の古墳5基で構成されています。昭和36年4月の発掘を初め3度調査されました。これらの古墳は、古墳時代後期に造られ、南側に出入口があり、北側に死者を葬る玄室、出入口から玄室までの通路である羨道を備えています。ヒスイ・メノウ・水晶の勾玉、ガラスの小玉、金環（耳環）などの装身具や鉄刀、鉄鏃の他に市内で初めて出土した横瓶をはじめとする各種の須恵器が副葬されていました。

被葬者は、波雁ヶ浜の製塩に関係ある族長級と見られます。



❼丸尾古墳群　丸尾古墳群は、若宮古墳群の北側に位置し、6基の横穴式石室墳があります。

昭和36年4月の発掘調査で、須恵器・土師器の他に、ヒスイ・メノウ・水晶の勾玉、ガラスの小玉、金環（耳環）などの装身具や鉄刀、鉄鏃の他に市内で初めて出土した横瓶をはじめとする各種の須恵器が副葬されていました。



❽古尾稲荷社　岐波地区周辺の商工会関係者の間で、地域事業の発展祈願を目的に、昭和28年4月、日の山の南東側中腹に古尾八幡宮から稲荷神社の分霊が遷座されました。多くの奉賛者によって稲荷堂が建設され、日の山登山口から稲荷堂まで朱塗りの鳥居が多数建てられました。

稲荷神社由縁の初午の日や、春・秋の祭り行事がありました。

昭和60年2月11日、日の山中腹から、南側のふもと、字向井に稲荷社を遷座し、現在の古尾稲荷神社となりました。

❾キワ・ラ・ビーチ　青い海、白い砂浜の若宮海水浴場は、平成8年夏、地中海のリゾートをイメージした通年型レジャー施設としてリフレッシュしました。

わかみやばしを渡ると、ワシントンヤシ、遊歩道を抜けるとマールの家（海の家）があります。マールの家は、1階　温水シャワー室・更衣室、洗面所、管理人室があり、石の階段を上がったと2階には、展望テラス、スタッフルーム・研修室があります。屋外施設では、休憩テラス、炊事場、キャンプ広場などがあります。

遠浅の穏やかな海が続き、水質も良好で、泳ぎやすく、潮干狩りが楽しめます。

❿海岸山三光寺　もとは、門前の東南の一隅（門樋頭）にあって、海岸山菩提寺という天台宗の寺で、大内家の伽藍でした。

天文20年（1551）大内義隆が滅び、この寺も衰退しました。

住職であった道圓は、本願寺の顕如上人の弟子となり、法名も了西と改めて帰国し、天正17年（1589）4月10日門前村より菩提寺を岐波浦に移転し、天台宗から浄土真宗に改宗し、創建しました。

寛永9年（1632）三光寺という寺号を本山から賜りました。

⓫中須賀の石仏　長方形に盛土され、中心部より少し北側に花崗岩の大石があり、地上高280cm、方角は北北東向きです。他に4個の石が配されています。

江戸時代中期にできた「地下上申」には“中塚石仏”と記されています。

石仏は「馬塚」「山姥の杖」「源為朝の杖」の別称があります。石仏といわれる遺跡は何であるかはっきりしません。昔、津波でたくなった人々を慰霊した石碑ではないかともいわれています。

中世の遺物としては、石仏のある一帯で、瓦器のかめ、土師器の鉢や皿、かなえの脚部分等が出土しています。

⓬旧山陽荘（山口宇部医療センター）　昭和17年10月29日軍事保護院傷痍軍人療養所山陽荘として創設され、昭和20年12月1日国立療養所山陽荘として発足。

昭和21年5月ニュージランド軍の接収命令を受け、その後2年間はニュージランド軍の宿舎として使われ、昭和23年8月接収が解除されました。

山陽荘は日本における結核の外科手術では先端をいく病院でした。平成20年10月1日山口宇部医療センターと名称変更となりました。

広々とした芝生の片隅にはニュージランド軍が残していった記念碑があります。

⓭古尾八幡宮　主祭神　品陀和気命（応神天皇）

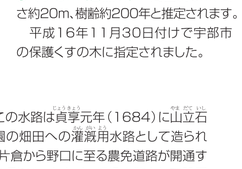
天平勝宝3年（751）に厚東武綱が宇佐八幡宮の分霊を勧請し、古尾の地（五反田南方高台）に創建し、古尾八幡宮と以て賀保庄(佐山、阿知須、東岐波、西岐波)の鎮守として崇敬してきましたが、天福元年（1233）南方と北方に分社されました。明治19年（1886）南方八幡宮末社稲荷神社を以て氏神とし、明治43年（1910）豊浦郡内日村の大河内八幡宮の遷座を請け、稲荷神社、赤崎神社、王子権現、若宮社、松堂社以下村内の小社（各鎮守社）を勧請・合祀して古尾八幡宮と改称。明治44年波雁ヶ浜に社殿を建立、東岐波の産土神社としています。

⓮三保虎五郎の墓　海幸翁三保虎五郎は、安永4年（1775）生、安政元年（1854）没。兵庫の貿易業者柴屋長太夫のもとで日本海を通り、蝦夷（北海道）や樺太（サハリン）に行く北前船に乗組み海産物の貿易に従事。主人の屋号「柴屋」を与えられ柴屋虎五郎とも称しました。「三保」姓は雲州（島根県）美保神社の神官祝氏から得たものといわれています。岐波浦の畔頭として活躍するとともに部坂神兵衛正彝が丸尾波戸大修理の時、協力しました。

樽太から持ち帰ったトナカイの角は古尾八幡宮と防府天満宮に現存しています。

墓は、岐波墓地にあります。

⓯東條恩師紀念林の碑　東條三郎校長は、吉敷郡小鯖村の出身で、明治22年（1889）東際尋常小学校に着任し、後に第6代目の校長となり、大正13年（1924）退職するまで35年間、東岐波の教育に尽くされました。　明治41年（1908）同窓生1,774人は波雁ヶ浜に敷地を買い、小松を植え“東條恩師紀念林”を造成。明治42年9月5日石碑を建立しました。東岐波小学校の校庭には、東條校長の胸像があります。



⓰東岐波雁ヶ浜　波雁ヶ浜はもと「計山」という字が書かれていたようです。年貢を計る所であったからという説と、「墓あり山」からはかり山となったという説があります。

明治の終わり頃から波雁山あるいは羽雁山の字を使っていたようですが、大正13年（1924）、宇部鉄道が開通して海水浴客誘致に伴い波雁ヶ浜と名付けました。

波雁ヶ浜は、享保年間（約300年前）花園に住んでいた野村又右衛門が防砂林として日向松の苗を植えたのがはじめと伝えられています。

⓱波雁ヶ浜　波雁ヶ浜はもと「計山」という字が書かれていたようです。年貢を計る所であったからという説と、「墓あり山」からはかり山となったという説があります。

明治の終わり頃から波雁山あるいは羽雁山の字を使っていたようですが、大正13年（1924）、宇部鉄道が開通して海水浴客誘致に伴い波雁ヶ浜と名付けました。

波雁ヶ浜は、享保年間（約300年前）花園に住んでいた野村又右衛門が防砂林として日向松の苗を植えたのがはじめと伝えられています。

⓲東岐波郵便局舎跡　明治36年（1903）12月舛富計松氏が花園東に花園郵便受取所を開設。明治43年（1910）3月東岐波郵便局と改称し集配事務を開始。

大正5年（1916）8月花園南に移転しましたが業務拡張と利便を考えて、昭和5年6月、石碑が建立されている国道190号の地に移転し、昭和39年8月までの34年間地域の共益に尽くしました。

⓳大岩（厚東氏伝説馬蹄跡）　この地区の丘陵には花崗岩の大岩が点在しています。この丘陵の西側の一角に、高さ2～3mの4個の大岩が一団となって土中から出ています。この中の東側2個の上には、それぞれ1か所、直径約18cm深さ約3cmの馬蹄形状のくぼみがあります。このくぼみは、その昔、厚東氏が大内氏に攻められた時、厚東氏の武将が反撃のため霜降山から馬に乗ってこの岩へ跳んできた時の蹄の跡といわれる伝説があります。

⓴東岐波雁ヶ浜　波雁ヶ浜はもと「計山」という字が書かれていたようです。年貢を計る所であったからという説と、「墓あり山」からはかり山となったという説があります。

明治の終わり頃から波雁山あるいは羽雁山の字を使っていたようですが、大正13年（1924）、宇部鉄道が開通して海水浴客誘致に伴い波雁ヶ浜と名付けました。

波雁ヶ浜は、享保年間（約300年前）花園に住んでいた野村又右衛門が防砂林として日向松の苗を植えたのがはじめと伝えられています。

㉑大神宮遥拝所灯籠　丸尾原の畑田の一角に遥拝所といわれている石灯籠があります。それには「高嶺大神宮」「天保十一年庚子…」側面には「参講中」と刻んであります。高嶺大神宮は山口大神宮のことであり、伊勢神宮と同じ祭神であるので、お伊勢信仰の講中が建てたものとおもわれます。

※天保十一年庚子は1840年

㉒山立石水路架橋　この水路は貞享元年（1684）に山立石溜池築堤と共に、花園の畑田への灌漑用水路として造られました。昭和45年に片倉から野口に至る農免道路が開通するにあたって、台地を掘り割ったため、架橋水路として設置されました。

㉓花園小学校跡　岐波村（東岐波と西岐波）と井関村（阿知須）が共同で開校した最初の小学校で、明治6年（1873）から明治16年（1883）まであった場所です。

校舎は茅葺きの借家27坪（89.1㎡）と粉葺きの新築30坪（99㎡）の2棟で、敷地は約250坪（825㎡）でした。なお、ここには万延元年（1860）から明治6年（1873）まで野村善一が子どもを指導していた寺子屋（野村塾）がありました。

㉔門前の大師堂　さえん峠（さやの峠）入口の北側山中に白松新八十八ヶ所の四十四番札所の大師堂があります。

堂の中には、旧岐波村三十三観音のうち、十五番十一面観音と二十六番聖観音そして金剛夜叉明王が安置されています。

この大師堂は、明治28年（1895）にできた新四国八十八ヶ所以前の天保3年（1832）から設置されていたと伝えられています。

東岐波には、22ケ所に大師堂があります。

㉕焼夷弾投下被災地の碑　太平洋戦争末期の昭和20年7月2日未明、宇部空襲の余波で、花園東部から前田中心部にかけて焼夷弾が多数投下され、全焼家屋39戸、半焼8戸、死者2人、重傷者5人の被害を受けました。この石碑は悲惨な戦争が繰り返されないようにとの願いを込めて、平成19年3月に建てられました。

㉖東條恩師紀念林の碑　東條三郎校長は、吉敷郡小鯖村の出身で、明治22年（1889）東際尋常小学校に着任し、後に第6代目の校長となり、大正13年（1924）退職するまで35年間、東岐波の教育に尽くされました。　明治41年（1908）同窓生1,774人は波雁ヶ浜に敷地を買い、小松を植え“東條恩師紀念林”を造成。明治42年9月5日石碑を建立しました。東岐波小学校の校庭には、東條校長の胸像があります。

㉗宝篋印塔（善照寺）　花崗岩で造られ、台石を含めて高さは約3.4mあります。明治43年(1910)頃に聖社にあったものを善照寺境内に移設したといわれています。正面には「奉納供養塔　天下和適　大乗妙典　日本廻國　日月清明主」右側面に「寛政八丙辰二月吉日」左側面に「当村行者　吉右衛門」の刻字があります。また塔の上部四方には、阿弥陀、宝生、阿閦、不空成就の各如来を表す梵字が刻まれています。年代は異なりますが、ほぼ同形のものが㊼弘済寺境内にも設置されています。

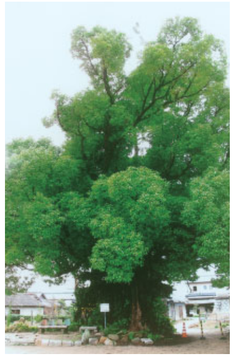
※寛政八丙辰は1796年

㉘佛光山善照寺　永享年間（1429～1440）頃、日の山万ノ峠の近くに草庵を結び善翁庵と称したことに始まり、最初は天台宗、後に禅宗の道場となって禅能山桃林寺といっていましたが、永禄12年（1569）大内輝弘の乱で近郷の仏閣とともに焼失しました。寛永2年（1625）に安部刑部左衛門政房は浄土真宗本願寺十二世准如上人の弟子となって法名を政西と名のり、浄土真宗に改宗しました。

寛永21年（正保元年1644）に政西の子西円が本堂を建てて寺号善照寺を受け、その後享保2年(1717)に本堂を花園村に引地再建したといわれています。

㉙くすの木（善照寺）　周囲約3m、高さ約20m、樹齢約200年と推定されます。

平成16年11月30日付けで宇部市の保護くすの木に指定されました。



㉚地蔵像（東岐波地区最大）　花崗岩で造られ、像の高さは1.45m、台座をあわせると2.5mあり、東岐波地区内では最大です。　鎌倉時代以降に発達した円頂形僧形で、左手に摩尼宝珠、右手に錫杖を持った延命地蔵像です。享保8年（1723）に地元の人達により健康と繁栄を祈って建てられましたが、大正末期頃までは、阿知須や西岐波への往還道（花園通り街道）の道標でもあったといわれています。

㉛庄屋野村長右衛門の墓　高さ約1.7m、幅約43cmの花崗岩墓石には「元禄三庚午十一月二十九日　帰真一渓浄心禅定門霊位　野村長右衛門」の刻字があります。この墓石は応永年間（1394～1427）頃から、南方及び北方八幡宮の政所、続いて江戸時代前期末から寛延2年（1749）まで岐波村の庄屋を勤めた野村家の、17代長右衛門の墓碑で、現在東岐波地区で名前が刻まれている墓としては最も古いといわれています。※元禄三庚午は1690年

㉜佛光山善照寺　永享年間（1429～1440）頃、日の山万ノ峠の近くに草庵を結び善翁庵と称したことに始まり、最初は天台宗、後に禅宗の道場となって禅能山桃林寺といっていましたが、永禄12年（1569）大内輝弘の乱で近郷の仏閣とともに焼失しました。寛永2年（1625）に安部刑部左衛門政房は浄土真宗本願寺十二世准如上人の弟子となって法名を政西と名のり、浄土真宗に改宗しました。

寛永21年（正保元年1644）に政西の子西円が本堂を建てて寺号善照寺を受け、その後享保2年(1717)に本堂を花園村に引地再建したといわれています。

㉝宝篋印塔（善照寺）　花崗岩で造られ、台石を含めて高さは約3.4mあります。明治43年(1910)頃に聖社にあったものを善照寺境内に移設したといわれています。正面には「奉納供養塔　天下和適　大乗妙典　日本廻國　日月清明主」右側面に「寛政八丙辰二月吉日」左側面に「当村行者　吉右衛門」の刻字があります。また塔の上部四方には、阿弥陀、宝生、阿閦、不空成就の各如来を表す梵字が刻まれています。年代は異なりますが、ほぼ同形のものが㊼弘済寺境内にも設置されています。

※寛政八丙辰は1796年

㉞くすの木（善照寺）　周囲約3m、高さ約20m、樹齢約200年と推定されます。

平成16年11月30日付けで宇部市の保護くすの木に指定されました。

㉟庄屋野村長右衛門の墓　高さ約1.7m、幅約43cmの花崗岩墓石には「元禄三庚午十一月二十九日　帰真一渓浄心禅定門霊位　野村長右衛門」の刻字があります。この墓石は応永年間（1394～1427）頃から、南方及び北方八幡宮の政所、続いて江戸時代前期末から寛延2年（1749）まで岐波村の庄屋を勤めた野村家の、17代長右衛門の墓碑で、現在東岐波地区で名前が刻まれている墓としては最も古いといわれています。※元禄三庚午は1690年

㊱地蔵像（東岐波地区最大）　花崗岩で造られ、像の高さは1.45m、台座をあわせると2.5mあり、東岐波地区内では最大です。　鎌倉時代以降に発達した円頂形僧形で、左手に摩尼宝珠、右手に錫杖を持った延命地蔵像です。享保8年（1723）に地元の人達により健康と繁栄を祈って建てられましたが、大正末期頃までは、阿知須や西岐波への往還道（花園通り街道）の道標でもあったといわれています。

㊲宝篋印塔　高さ125cmと小振りの宝篋印塔で「文化二年乙丑四月日」の建立となっています。塔身の四面に梵字の種子が刻まれ、隅飾りの耳が異常に横へ反り返っていて、江戸時代の特色を現しています。誰が何のために設置したのか不明です。

※文化二年乙丑は1805年

㊳庄屋部坂家跡　部坂家は北原にあって、江戸時代中期から数代にわたって岐波村の庄屋を勤め、明治の過渡期に戸長として村政を執りました。同家の先祖部坂弥六左衛門尉正信は、幼少のとき康正3年（1457）に、安芸国大田川の東岸、戸坂の地（現広島市戸坂町）から岐波村北原へ移り住むようになりました。その後、江戸時代の宝暦8年（1758）部坂嘉兵衛正俊が庄屋になってから5代通算120年間、村の開発に多くの事績を残してきました。現在、屋敷跡に残されているものは、敷石、石組の井戸と表側の石垣だけです。

㊴部坂神兵衛正恒墓碑　部坂神兵衛正恒は文政11年（1828）生、明治12年（1879）没。

通称を父と同じく神兵衛といいました。王子から流れる宮脇川は西福寺のある舌状の台地を迂回して北側に向かい、植松川と合流し、岐波浦唐樋へ流れていました。大雨の時には二つの川の増水で、一帯は水害を受けていました。明治4年（1871）から2年間、西福寺付近から水落に至る間に、幅2間（3.6m）長さ500間（約900m）の新川を開削して宮脇川とつないで五反田川を造り、水難を防ぎました。

㊵部坂正恒開墾記碑　明治8年（1875）、部坂神兵衛正恒は植松新堤を築造して、水を貯え山をうがち谷を渡して水を引き、北原の畑田6町歩を開作しました。それによって、多大な恩恵を受けた人達が、明治19年（1886）11月、部坂正恒の功績を顕彰するために碑を建てたものです。

㊶法輪山西福寺　浄土真宗西本願寺派に属す。寺伝によれば、開基慶祐は俗名　伊藤三郎左衛門尉祐綱といい、伊豆国の人（現在の静岡県）。同人は文安4年（1447）本願寺七世存如上人に帰依して法名を慶祐と改め、次いで八世蓮如上人の弟子となりました。文明5年（1473）布教のため西下して、岐地に一宇の草庵を結んだといわれています。

西福寺の住職は、先祖以来伊藤姓でしたが、明治維新後、近隣に同姓が多くできたので、この地方の旧地名から白松姓にしたと伝えられています。

㊷庄屋部坂家累代の墓所　北原墓地の一角に部坂家累代の墓があります。主なものとして、江戸時代中期、嘉兵衛正慶から嘉兵衛正興と続き、断続して庄屋を勤めた嘉兵衛正俊、嘉兵衛正之、嘉蔵、神兵衛正彝4代と戸長を勤めた弥二郎の墓などがあります。墓所に隣接して、神兵衛正恒の弟正明が養子に行った内藤家の墓もあります。

なお、部坂神兵衛正恒の墓は少し離れた場所に建てられています。

㊸向陽小学校・東際尋常小学校跡　花園小学校は就学を希望する子どもの増加で、将来校舎が手狭になることと、東岐波の中心より北側にあることから、学童の通学のために中心に近い所に移したい気運が高まってきました。そこで明治16年（1883）5月4日、磯地に校舎移転の話がまとまり、同年9月5日に新校舎が完成しました。11月3日に花園小学校は向陽小学校に校名を変更されました。明治16年の向陽小学校の記録によると、敷地約937㎡、校舎約214㎡の広さで、学童数は男子132名女子30名となっています。

明治20年（1887）4月に向陽小学校は東際尋常小学校に改められ、「東際」は“とうさい”が正しい読み方で、訓読では“ひがしきわ”と読むことができます。同年5月、経費節限のため金山と大石の分教室を廃止し、簡易小学校の開設目的で校舎を磯地立山の現在地に移すことになりました。

㊹多賀社跡　多賀社は北原では「お多賀さま」と呼ばれています。祭神は伊弉諾尊、伊弉冉尊で、子孫繁栄、五穀豊穣、縁結び等のご利益があって崇拝されました。今も向かって右に多賀社、左に毘沙門社の石祠が祀られています。昔、社の裏に競馬場があったということです。

江戸時代後期になる「寺社由来」には次の記載があります。

北原村
多賀大明神　九月十七日御祭礼
御殿　壱間四方　釣屋　壱間四方　拝殿弐間
二三間　社床壱畝

㊺庄屋部坂家跡　部坂家は北原にあって、江戸時代中期から数代にわたって岐波村の庄屋を勤め、明治の過渡期に戸長として村政を執りました。同家の先祖部坂弥六左衛門尉正信は、幼少のとき康正3年（1457）に、安芸国大田川の東岸、戸坂の地（現広島市戸坂町）から岐波村北原へ移り住むようになりました。その後、江戸時代の宝暦8年（1758）部坂嘉兵衛正俊が庄屋になってから5代通算120年間、村の開発に多くの事績を残してきました。現在、屋敷跡に残されているものは、敷石、石組の井戸と表側の石垣だけです。

㊻部坂神兵衛正恒墓碑　部坂神兵衛正恒は文政11年（1828）生、明治12年（1879）没。

通称を父と同じく神兵衛といいました。王子から流れる宮脇川は西福寺のある舌状の台地を迂回して北側に向かい、植松川と合流し、岐波浦唐樋へ流れていました。大雨の時には二つの川の増水で、一帯は水害を受けていました。明治4年（1871）から2年間、西福寺付近から水落に至る間に、幅2間（3.6m）長さ500間（約900m）の新川を開削して宮脇川とつないで五反田川を造り、水難を防ぎました。

㊼部坂正恒開墾記碑　明治8年（1875）、部坂神兵衛正恒は植松新堤を築造して、水を貯え山をうがち谷を渡して水を引き、北原の畑田6町歩を開作しました。それによって、多大な恩恵を受けた人達が、明治19年（1886）11月、部坂正恒の功績を顕彰するために碑を建てたものです。

㊽法輪山西福寺　浄土真宗西本願寺派に属す。寺伝によれば、開基慶祐は俗名　伊藤三郎左衛門尉祐綱といい、伊豆国の人（現在の静岡県）。同人は文安4年（1447）本願寺七世存如上人に帰依して法名を慶祐と改め、次いで八世蓮如上人の弟子となりました。文明5年（1473）布教のため西下して、磯地に一宇の草庵を結んだといわれています。

西福寺の住職は、先祖以来伊藤姓でしたが、明治維新後、近隣に同姓が多くできたので、この地方の旧地名から白松姓にしたと伝えられています。

㊾庄屋部坂家累代の墓所　北原墓地の一角に部坂家累代の墓があります。主なものとして、江戸時代中期、嘉兵衛正慶から嘉兵衛正興と続き、断続して庄屋を勤めた嘉兵衛正俊、嘉兵衛正之、嘉蔵、神兵衛正彝4代と戸長を勤めた弥二郎の墓などがあります。墓所に隣接して、神兵衛正恒の弟正明が養子に行った内藤家の墓もあります。

なお、部坂神兵衛正恒の墓は少し離れた場所に建てられています。

㊿向陽小学校・東際尋常小学校跡　花園小学校は就学を希望する子どもの増加で、将来校舎が手狭になることと、東岐波の中心より北側にあることから、学童の通学のために中心に近い所に移したい気運が高まってきました。そこで明治16年（1883）5月4日、磯地に校舎移転の話がまとまり、同年9月5日に新校舎が完成しました。11月3日に花園小学校は向陽小学校に校名を変更されました。明治16年の向陽小学校の記録によると、敷地約937㎡、校舎約214㎡の広さで、学童数は男子132名女子30名となっています。

明治20年（1887）4月に向陽小学校は東際尋常小学校に改められ、「東際」は“とうさい”が正しい読み方で、訓読では“ひがしきわ”と読むことができます。同年5月、経費節限のため金山と大石の分教室を廃止し、簡易小学校の開設目的で校舎を磯地立山の現在地に移すことになりました。

51法秀様　丸尾の墓地の一角に法秀様のお堂があります。天保年間（1830～1844）頃東仙寺（現在の弘済寺）に寄宿した旅僧で、薬草の知識があり、多くの病人を救ったといわれています。晩年は、難病を患い、東仙寺の縁の下で他人を寄せ付けずに死亡したと伝えられています。後に地元の人たちが石像を作って供養をしました。近年では、全ての悩みにも霊験があるとして多くの人々がお参りしています。

52砂山古墳　昭和38年に発掘された、単室の横穴式石室古墳で直径13m、高さ2～2.5mの円墳です。若宮古墳よりも新しく古墳時代後期か終末期（7世紀前半）のものと考えられています。石室の側壁は、花崗岩と緑泥片岩による小口積みで、副葬品は、鉄鏃1個だけです。現在は、石室の石組がくずれない様に砂で埋られ、上部がわずかか露出しています。

53山藤瓦工場跡　明治初年以降黒崎から西岐波の村松に至る海沿いに、赤レンガや黒瓦工場が群立していました。これらは、近くに産出する良質の粘土と宇部炭を利用したもので、戦後スレート製品が出現するまでは、地場産業の花形として活況を呈していました。現在かたちとして残っているのは、永ケ久保の山藤瓦工場跡に、先端が欠けた四角の赤れんがの煙突のみです。

写真（絵葉書）は美祢市立図書館所蔵

54救難所跡　明治38年（1905）に海上船舶の海難救助に備えて設立され、昭和6年まで機能していました。救助艇として、「神島丸」という八丁櫓の木造船が備えてありました。明治38年から大正14年（1925）までに救助した難船は、151隻に及ぶという記録が残っています。

55大神宮遥拝所灯籠　丸尾原の畑田の一角に遥拝所といわれている石灯籠があります。それには「高嶺大神宮」「天保十一年庚子…」側面には「参講中」と刻んであります。高嶺大神宮は山口大神宮のことであり、伊勢神宮と同じ祭神であるので、お伊勢信仰の講中が建てたものとおもわれます。

※天保十一年庚子は1840年

56山立石水路架橋　この水路は貞享元年（1684）に山立石溜池築堤と共に、花園の畑田への灌漑用水路として造られました。昭和45年に片倉から野口に至る農免道路が開通するにあたって、台地を掘り割ったため、架橋水路として設置されました。

57萬松山弘済寺　天平勝宝3年（751）からの古刹で開山は不明、文永5年（1268）に萩の亭徳寺三世法燈国師が西岐波の上の原に再興したといわれています。万治元年（1658）に曹洞宗になりました。享保2年（1717）弘済寺の末寺として丸尾崎に東仙寺が建立され、明治4年（1871）の寺社分離の折、弘済寺を東仙寺に移し現在の弘済寺としました。本尊は観音菩薩像とされ、境内には薬師堂や宝篋印塔、大師像、観音石像(旧岐波村三十三観音)などがあります。

58丸尾港埠頭（波戸）　丸尾港（新泊港）は延宝8年（1680）に開かれましたが、台風の度に埠頭は破損し修理を繰り返していました。現在の埠頭は、部坂神兵衛正彝が文政10年（1827）から11年にかけて三保虎五郎らと大修理したものです。

灯台は、天保6年（1835）に初めて木造の灯台堂が建設され、安政4年（1857）及び明治5年（1872）と二度改築されたものの昭和17年8月の台風で流失しました。現在の白色コンクリート製の灯台は、昭和27年に建設されたものです。

昭和16年撮影

59吉敷郡東岐波村役場跡　明治8年（1875）、岐波村戸長役場を古殿に開設しましたが、明治11年4月、戸長役場が火災となり、戸長であった部坂市之丞宅(磯地)を仮役場としました。

明治12年10月岐波村は、東・西岐波村に分割となり、明治15年（1882）西福寺下に吉敷郡東岐波村戸長役場を新築しました。

昭和26年8月花ヶ池の所に新しい村役場ができるまで69年間村政を司りました。

60青面金剛像　青面金剛像は、砂岩製で風雨曝しなので風化が進み、本来の姿は、六臂三眼のはずですが見極めが難しい。

正面の左側に「天明二寅十二月八日」と刻印してあります。像の足元には邪鬼らしいものが横たわり、その下に神使の、見ザル、言わザル、聞かザルの三猿が浮き彫りになっています。

青面金剛像は、現在宇部市では2体しか見つかっていません。

※天明二寅は1782年

61王子一本松跡　天福元年（1233）、磯地五反田の南方高台、古尾の地にあった古尾八幡宮が南と北に分霊された際、南北の氏子が一本松の所で、神宝を分けあったと伝えられています。しかし、一本松は昭和31年9月の台風のために枯死状態になり、その後伐採されました。老松が元気であったころの姿を見て、人々はその偉容に驚嘆したと思われます。老巨木の立上りは周囲4.5mあり、大人3人がやっと手をつなげる程でした。伐採後に調べた年輪は内部の腐食で判明できませんでしたが、大体350年ぐらいと推定されました。そうすると天福元年から起算すると、2代目の松だろうともいわれています。

62王子権現社跡　社伝によれば、王子権現は、天平勝宝3年（751）古尾八幡宮の鎮座よりも以前にあったとされ、賀保庄で最初に鎮座した故に、賀保庄総鎮守の神社として崇められ、別称一の宮権現といいました。しかし、鎌倉時代頃、南方八幡宮の末社になったものと考えられます。

中世後半には白松庄権現宮と呼ばれていたことが権現社に伝わる応永16年（1409）の鰐口の銘文によって知ることができます。

祭神は天御中主尊、天照大神、素盞嗚命の三座。

なお、明治43年（1910）に同社は古尾八幡宮に合祀されましたが、現在、跡地に残されているものは、鳥居、手洗石、灯籠そして社殿のあった礎石だけです。

63子を抱かしょうの坂　磯地から王子へ通じる道に西蓮寺坂があります。昔は道幅が狭く雑木や竹が覆い被さり、昼でもうす気味の悪い所でした。いつのころか、里人の間から怖い話が伝えられています。

その話とは一、暗くなって西蓮寺坂を通ると、子どもを抱いた女が現れて「私はある罪を犯した者です。罪を償うために念仏を唱えなければならないのですが、この子を抱いていては満足に唱えることができません。しばらくの間、この子を抱いてもらえませんか」といって人に預けるのです。　そして、女は念仏を唱えるのですが、その時間の長いこと…。始めのうちは抱いていても重いと感じなかった子どもが、次第に重くなり遂に